日本人は家を「内」それを越えた世界を「外」と理解している。「内」では、個人間の区別が消えて、例えば、夫にとって妻は「家内」であり、妻にとって夫は「うちの人」「宅」となる。部屋や家に関連して「内」「外」ということはあるけれど、家族関係に使われることはないので、このような区別はヨーロッパの言語には見られない。これに対し、日本では、この内と外の対比は、個人の心から、建物としての家に、コミュニティとしての国や町にまで広がる。そして、この内と外の概念は日本人の生活様式の理解に直接つながると言ってもよいだろう。	240字	日本人は家を「内」、それを越えた世界を「外」と理解している。「内」では、個人間の区別が消えて、例えば、夫にとって妻は「家内」であり、妻にとって夫は「うちの人」「宅」となる。ヨーロッパの言語では、部屋や家に関連して「内」「外」ということはあるけれど、家族関係に使われることはなく、このような区別は見られない。日本では、この内外の対比は、個人、家、国や町にまで広がる。そして、この内外の概念は日本人の生活様式の理解に直接つながると言ってもよいだろう。
(内と外と)まったく同じ現象が家の構造によって明らかになる。それは人間関係の構造とみなされる家と言ってもよく、家の内部の配置に反映されている。とりわけ、日本の家は区別の余地のない内部の融合を示している。どの部屋も切り離そうという意図で施錠やカギで仕切られていないのだ。確かに、障子や襖というパーティションはあるが、これは互いの信頼の上になりたつ一体性のうちの区分だ。このような仕切りは家の中に対立があることを示しているが、それを取り除けば、それ自体まったく障壁のない、丸見えの状態になる。	250字	この「内」「外」は家の構造にも見られる。そは人間関係の構造でもあるが、日本の家の内部では、区別の余地のない融合が見られる。つまり、切り離す意図で錠や鍵がついた部屋はないのだ。確かに障子や襖はあるが、それを取り除けば、内部は障壁のない丸見え状態になる。
第二に、日本の家は外と厳格に区別されている。たとえ部屋にカギがなくても、外につながるドアには常にカギがある。また、その向こうにフェンスや壁があるかもしれないし、極端な場合には、防御用の茂みや堀があるかもしれない。日本人は家に帰るとき、下駄や靴を脱ぐのだが、まさにこの行動によって日本人は内と外の間に明確な区別の線をひくのだ。	160字	また、日本の家は外とは厳格に区別される。外につながるドアには常に鍵があり、さらにはフェンス、壁、防御用の茂みや堀があるかもしれない。日本人は外から家に帰ると、履物を脱ぐが、この行動によって、外と内に明確な線を引くのだ。

日本人は家を「内」、それを越えた世界を「外」と理解している。「内」では、個人間の区別が消える。例えば、夫にとって妻は「家内」、妻にとって夫は「宅」となる。ヨーロッパの言語では、部屋や家の「内」「外」ということはあるが、家族関係に使われることはない。日本では、この内外の対比は、個人、家、国や町にまで広がる。そして、この「内」「外」の概念は日本人の生活様式の理解につながる。

この区別は家の構造にも見られる。それは人間関係の構造を示すが、日本の家の内部では、区別の余地のない融合が見られる。つまり、錠や鍵がついた部屋はないのだ。確かに障子や襖はあるが、それを取り除けば、内部は障壁のない丸見え状態になる。 また、日本の家は外と厳格に区別される。外につながるドアには常に鍵がある。その外側にはさらにはフェンス、壁、防御用の茂みや堀があるかもしれない。日本人は帰宅し履物を脱ぐが、この行動によって、外と内に明確な線を引くのだ。